『無者キリスト』を読む （新宿集会にて）

第七転「復活」（マリヤ！ラボニ！）
――第一部　キリストの実存十転――

２０１９年11月10日
弘野慶次郎

つぼをうちこわして　聖霊の香油　マグダラのマリヤ　無的実存　自分の中に霊震が起きる
「マリヤ！」「ラボニ！」　中へ直ちに突破突入する　新天新地への希望　終末　全的に、あるがまま

●つぼをうちこわして

皆さん、お早うございます。今日は第七転「復活」の中の129頁から、「マリヤ！　ラボニ！」のところからです。

小池辰雄の信仰の在り方というものは稀有（けう）のものだから、是非ともこの在り方を伝えたいという思いが僕には非常に強い。奥田先生でさえ、小池辰雄を伝える困難さということを実感しておられるということを、僕は初めて知ってびっくりしましたけれども。

確かに小池辰雄を知っている人がだんだん歳をとってきて少なくなってきた。この信仰の在り方は、どこへ行っても、やはり直々（じか）のキリストを伝えるという、その伝え方がどこの教会でもやはり薄い。直にキリストの十字架の贖いを受けとって伝えている小池の在り方というのが非常にやはり稀有なもので、これはちょうどパウロの信仰と同じ次元を何とかして皆さんに知ってもらって、それを伝えてほしいという思いが僕は非常に強い。

それで「無者キリストを読む」ということを思いついたけれども、いかんせん小池の『無者キリスト』はやはり難しいですね、その表現とかが。僕はちょっと揚げてきたけれども、小池の、

「根源現実、根源欲求、聖意体現、無条件降伏、無的実存、全的自己献供」

という言葉がどんどん出てくる。こういう四字熟語みたいな言葉を聞いても、非常に分かりにくいのではないかと僕は常々（つね）思っている。だから、それを何とかして我々の言葉で、生きた言葉で伝えていきたい。この『無者キリスト』は名著だと思うんですよ。それを何とかして伝えたいという思いが僕は非常に強くて、それでこういう「無者キリストを読む」という読書会をやり始めたというのが僕の実感なんです。

それで、今日は「復活」の所の、129頁の「マリヤ！　ラボニ！」というところから読んでいきたいと思います。これは「マグダラのマリヤ」という小見出しが付いてます。どの「マリヤ」なのか、「罪ある女」だとか、いろいろと書かれているので、どの女の方なのかとい

うのがよく分からないんです。

「石膏の壺をぶちわって、イエスの葬りの準備をしてくれた」

というような記事がありますけれども、その石膏の壺をぶちわった女がどういう女性であったかというようなことを、小池辰雄はいろいろと推測はしている。それは結局は、どの女性であってもいいけれども、

「その本質は自己をぶち破って、石膏の壺をぶち破って、キリストを讃えた。キリストに死の準備をしてくれた」

というようなことが書かれている。

それでちょっと「マリヤ！ ラボニ！」に入る前に、255頁〔第二部「人間の福音的実存七相」の第六相「棄身・棄石」〕／「ナルドの香油」の項〕に「つぼをうちこわして」という見出しがありますけれども、これはその壺をうちこわした女性のことをいろいろと小池が推測している。その推測のところはとばして、今日読む「マリヤ！ ラボニ！」の女性の在り方を256頁の7行目から、イエスとその女性との関係みたいなものが書いてあるので、そこを見た上でこの「マリヤ！ ラボニ！」に入っていきたいと思います。

《そうだとすれば、マルコ14章、マタイ26章の「ある女」がこの「罪のあった女」であると見てもさしつかえないわけである。そしてこの女が同じルカ8・2の「七つの悪鬼を追い出されたマグダラのマリヤ」でないともいえない。霊的な女性の直観は、弟子たちよりも深いものがあったであろう。イエスの死期を洞察し、主への献身、棄身の心を一壺の香油に託さんとした。

「このナルドの香油をのこりなく主に注ぎかけよう。もうこの香油つぼは二度とつかうまい。それならアラバストロンをぶちこわそう！」

そういった女の棄身の一念。全身全霊をこめた一念。こんどはイエスの首にナルド油をそそいだ。惜しみなき愛、言い難き愛惜の情、感恩の涙と共に、「つぼをうちこわして」、すなわち、己れをぶち砕いて、棄身の心で。彼女の心はナルドの香油よりも芳香しくなっていた。香油以上に彼女の心がそそがれたのである。》

この女性がどういう姿でナルドの香油の壺を打ち破ったかということが書かれています。

「女の棄身の一念。全身、全霊をこめた一念。……惜しみなき愛、言い難き愛惜の情、感恩の涙と共に、「つぼをうちこわして」、すなわち、己れをぶち砕いて、棄身の心で。彼女の心はナルドの香油よりも芳香しくなっていた。香油以上に彼女の心がそそがれたのである。」

と。こういうふうに小池はこの女性の行為を、

「香油以上に彼女の心がそそがれた」

というふうに書いているわけです。

《イエスの寂しさをなぐさめた「ある女」

かかる心魂に対して、この場合三百デナリで売ってどうのこうのという弟子どもの方式的、律法的な考え方がいかにあたらないかは最早論を要しない。おのれをことごとく注ぎかけてくるこの女の愛に、イエスは無量の心で反響した。ただひとり十字架にかかろうというイエスである。弟子どもが主の心を知らず、散ることも予測しているイエスである。ただひとりの女性が、――おそらくマグダラのマリヤ――葬りのためあらかじめ最高の香油をそそいでくれた。人間イエスとしてもそれはたまらなくなぐさめられたわけである。この「ある女」は真っ先に、自分の棄身の行為をもって、キリストの十字架の受難を予告したわけである。その意味において、あの大使徒ペテロよりも、この「ある女」の方がイエスを知っていたというものである。神の子の寂しさは誰も知る者がない。弟子たちもだめである。ところがこの「ある女」がイエスの寂しさに応えた。

イエスの全身に香油をそそいだこの「ある女」の心と行為を全的に受けとめて、イエスは弟子どもに、

「よく聞け、全世界のどこででも、福音が宣べつたえられるところでは、この女のした事も記念として語られよう」

と驚くべき裏づけを与えた。

アラバストロンをぶちこわして！　ここに「ある女」の行為の焦点がある。一切を捧げた、一切を棄て切った棄身の態勢。これが「心を尽し、精神を尽し、思いを尽し、力を尽しての具体的なあらわれである。信仰といい、愛といい、要するに棄身の一語につきる。》

ここで、この女性のやったことが、

「福音が宣べつたえられるところでは、この女のした事も記念として語られようと驚くべき裏づけを与えた」

と書いてあるけれども――これがその数行前のマグダラのマリヤだと思われる――その「ある女」の行為が直弟子たちよりももっとイエスのことが分かっていた。それで、葬りの用意をしてくれた。

「キリストの十字架の受難を予告した」

のがこの女性であったということで、弟子たちよりもはるかにイエスの行く末を分かっていた。それで、本当に棄身の愛でイエスに香油を注いだということなんです。それほどこの女性の行為が讃えられている。どれだけイエスの寂（さび）しさを慰めたかというようなことで、ここで小池辰雄が書いてくれている。

「ここに「ある女」の行為の焦点がある。一切を捧げた、一切を棄て切った棄身の態勢。これが「心を尽し、精神を尽し、思いを尽し、力を尽して」の具体的なあらわれである。信仰といい、愛といい、要するに棄身の一語につきる。」

と、キリストも讃えられたこの女性の行為。我々もこの女性をもう一度しっかりと知って、信仰の在り方ということを学びたい。

《詩篇23篇に、

「わが首（こうべ）に油をそそぎ給う、わが杯（さかずき）は溢るるなり」

とあるが、我々はキリストに聖霊という霊油をそそがれた。それで我という杯はあふれるのである。我々も亦、隣人に霊油をそそいで、同じめぐみにあずからしめたくなる。その他に本当の伝道はない。

この「ある女」は限りない女性らしさ、やさしい思い遣り深い愛の女であった。雑草の中に花咲く一輪の撫子の如き存在であった。イエスはこの小花を激賞した。全世界に拡まるべき福音の芳香の一息吹をこの女性の香油に体感したので。》

ここで詩篇23篇を引用しておられる、

「**わが杯は溢るるなり**」

と。これは詩篇に出てきます。ところが、

「我々自身がこのキリストという聖霊に油を注がれた存在である」

ということをここで言っている。この「我々」が大切ですよと。

「われという杯が溢れる」

という。我々一人ひとりにもこの杯が溢れるということをそこで言っておられる。

「我々も亦、隣人に霊油をそそいで」

ということで、何とかしてこのキリストの本当の愛を一人でも多く知ってほしい、それが本当の伝道ですよということを言ってくれている。そしてまたこの女性に戻って、

「イエスはこの小花を激賞した。」

とここで繰り返し言っておられます。

●聖霊の香油

次の文章も非常に大切なことが書いてあります。

《聖霊の香油

人生において、自分自身が、このような聖霊の香油となり、キリストの霊生の開花となって、この荒蓼たる曠野に福音の香りを放つ。それが、キリストの十字架の恩寵と苦難に応え、復活の恩恵と歓喜に通ずる存在的な証示である。また最後の審判、新天新地の到来まで、「ある女」と同じ霊香となって、十字架道を辿り、復活の霊生の歓喜を世につたえん哉である。

福音は福音することによってのみ把握される。誰が空気を観察して生きているか。誰が水はH_2Oであるということを理解して渇きをいやすか。誰が米の成分を研究し分析して飢えをみたすか。たましいの糧たる聖書の現実を観察し、理解し、研究し、分析

して聖書の現実がつかめるか。聖書の現実は、全身投入をもってそのドラマの活人物となり自ら活現するまではつかめないのである。

天下の女性に申したい。

「神の栄光はキリストに現われ、キリストの栄光は男に現われ、男の栄光は女に現われる」

とパウロが言っているが、女性は栄光の最高の冠である。女性が有つべき正当な権利は民主的社会人として得べし。しかし、女性の本領は愛の権化となって神の栄光をあらわすにある。

この「ある女」（マルコ14、マタイ26）が、「罪の女」（ルカ7）であろうと、「マグダラのマリヤ」（ルカ8）であろうと、「姦淫の女」（ヨハネ8）であろうと、「ベタニヤのマリヤ」（ヨハネ12）であろうと、それは要するにどうでもいい問題である。彼女らは皆キリストの霊愛に浴し、同質的な棄身の愛をキリストに捧げたたましいであった。

人生は曠野である。キリストと共に曠野の中で、自ら光となり、水となり、塵芥となり、肥料となって、イザヤ書第35章に

「沙漠はサフランの如く」

と詠われているように、曠野を百花繚乱の原野に化することである。問題中の問題は、運命、環境、社会状況、政治問題に非ず、人の心に在り。万人は宗教心を有たざるべからず。然らずんば二〇世紀の人類は亡びゆく。》

ここで、最後と最初のところとはちょっとニュアンスが違うんですけれども、「聖霊の香油」という前半のところで、ここでしっかりと自分自身がこのような聖霊の香油とならなければならない、そういうようになってほしいということを書いた上で、

「十字架道を辿り、復活の霊生の歓喜を世につたえん哉である。」

と書いてありますように、十字架の恩寵を受けとったその喜びを何としても伝えて行きたいという。僕は他のキリスト教会にも行きますけれども、この十字架を喜んでいるということが全然出てこないですよ。

「十字架を喜んでます、これが嬉しいんですよ」

という言葉がやはり遠いんです。だからここに、

「十字架道を辿り、復活の霊生の歓喜を世につたえん」

という。十字架の贖いを行って復活をいただいたというその喜びを何とかして伝えていきたい。その次の言葉も非常に大切なんです。

「福音は福音することによってのみ把握される。」

「研究ではありませんよ」と、その次に出てくるでしょ。

「研究し、分析して聖書の現実がつかめるか。聖書の現実は、全身投入をもってそのドラマの活人物となり自ら活現するまではつかめないのである。」

という。それが

「福音は福音することによってのみ把握される」

ということ。

「我々がその喜びの中で生きていかなければ、聖書は分かりませんよ」

と。聖書をなんぼ読んでも、研究して、難しいことを研究しても、そういうことではない。自分の喜びが、喜んでいるということが福音を福音するということで、どうしても

「この喜びをみんなに持ってほしい」

というようなことをしないと、聖書の現実は絶対に理解できないという。

まず、小池は言いますね、

「聖書はドラマだ。そのドラマの中に躍り込まないと分からない」

という非常に大切なことを言ってくれている。そして最後に、

「人生は曠野である。」

と。決していい所ではないんですよと。もう本当に戦争はある、飢饉もある、災害もある、何でもある。それから人間関係でも、いろんなことがあって、みんな悩んでいる。そういう人生は曠野である。その曠野に、

「キリストと共に曠野の中で、自ら光となり、水となり、塵芥となり、肥料となって、イザヤ書第35章に「沙漠はサフランの如く」と詠われているように、曠野を百花繚乱の原野に化することである。」

そういうふうなものに我々がならないといけないんですよと。それから最後に、

「問題中の問題は、運命、環境、社会状況、政治問題に非ず、人の心に在り。万人は宗教心を有たざるべからず。」

と書いてます。全部そういう宗教心を持っているんだから、本当の信仰にきてほしいという小池の願いがここに表れています。

「イエスはこの小さな花を激賞された」

ということが書いてありますけれども、我々一人ひとりも本当に小さな目立たない花なんですよ。けれども、目立たない花が喜んでおれば、絶対、キリストにも喜びがある。さっき歌いました讃美歌291番「主にまかせよ汝が身を」に、

「主にまかせよ、汝が身を、主はよろこび　たすけまさん。」

と書いてある。自分が本当にキリストに身を任せれば、主の方が喜んでくださる。我々の喜びよりも先に、我々が帰ってきたら

「天に喜びがある」

ということです。主の方が先に喜んでおられるんだということが、この讃美歌に書いてある。僕はこれはいい歌詞だなと思って歌いました。

「主にまかせよ、汝が身を、主はよろこび　たすけまさん。」

と、その通りですよ。本当に任せるだけなんですけれども、それがなかなか人間には難しい。「任せる」ということは、十字架の贖いを受けとらないと、とても

「任せる、棄身の愛」

なんていうのは出てこないということなんです。

「棄身」とかいう言葉は難しい。何か恐いですよ、棄身とかいうのは。けれども、その棄身というのは、

「ごく自然に喜んでいたらそれが棄身という姿だ」

ということになるのではないかと僕は思っています。それで、

「この女性が別に誰であってもいい」

と書いている。「罪の女」であっても、「ある女」であっても、「マグダラのマリヤ」であっても、「姦淫の女」、「ベタニヤのマリヤ」であっても、その女性が誰であってもいいということを最後に書いています。女性の直感みたいなものは弟子たちよりも凄く優れているから、こういうふうな記事が残ったんだというようなことを書いてます。そしてここで、

「恐らくこれはマグダラのマリヤだ」

と小池辰雄は思っている。

●マグダラのマリヤ

それで、「第七転　復活」の「マリヤ！　ラボニ！」のところに行きたいと思う。これがマグダラのマリヤでも誰でもいいけれども、要するに、マグダラのマリヤだと小池は言って、その復活のキリストと出会う所が今から読むところです。今読んだところの、この女性がどういうことをしたかということを下敷きにして、129頁に戻って、この復活のところを読んでいきたいと思います。

≪「マリヤ！」「ラボニ！」（ヨハネ20・16）

マグダラのマリヤ

ガリラヤ湖の西の方、テベリヤの街道をはなれ、北西に向って数キロ歩くとマグダラという寒村があった。そこの出身のマリヤはその地名に因(ちな)んでマグダレナとも呼ばれていたが、七つの悪鬼になやまされていたのを、イエスに癒(いや)され、心身の救にあずかった（ルカ8・2）。情熱的なこのマリヤは、それ以来、献身的な純情をもって他の女たちと共にイエスの伝道に随行し、奉仕していた（ルカ8・2～3）。

このマリヤが同じルカ伝7章の「罪ある一人の女」であるか、マルコ伝14章の「ある女」であるか、それともいずれでもないかはわからない。しかし生命の恩人であるイエスに、高価な純粋なナルドの香油の入っている石膏の壺をぶちわって、そのすべてをイエスの首に注いだ「ある女」において、私はこのマグダラのマリヤの純情を見たいと思う。

救われがたかったこのマリヤが、キリストに完全に救われたので、感謝の真心をこめて、とっておきのナルドの香油を全的にイエスに注いだ。しかも「壺をわって」とは、自分を全的に献げての心境の現われである。あるがままの自分を全的に投げ出す、そういうあり方がまことの愛であり、まことの信である。イエスが悦んだのは、みなそういう在り方であった。それがどういう人であってもいい。イエスは人間を常識的な定評によって品さだめをなさらぬ。取税人であろうと、パリサイであろうと、盗賊であろうと、遊女であろうと、放蕩息子であろうと、癩病人であろうと、何であろうと、その人の健不健、善悪の如何を問わない。ただその人があるがまま全的に自分を投げ出してイエスに信じ入るとき、無条件降伏をするとき、これを直ちに救うのである。

「ある女」も、「罪ある一人の女」も、マグダラのマリヤも、そのような女であった。だから救われた。自分の現状がどうであろうと、それ自体を全的にキリストに投げかけること、これがキリストを信ずるということである。文字通り「無条件」の世界である。マルコ伝第14章の「ある女」はそのような在り方であったので、イエスは言った、

「この女は、なし得るかぎりをなして、私の体に香油をそそぎ、あらかじめ葬りの備えをしたのだ。本当におまえたちに言うが、全世界どこででも、福音の宣べ伝えられるところには、この女のしたことも記念として語られるであろう」（マルコ14・8～9）

と。》

さっき読んでいただいたところを下敷きにして、これはどの女でもいいんだよと。「マグダラのマリヤ」と一応、表題が付いてありますけれども、

「これがどの女であってもいい。その魂の在り方が重要なんだ」

というようなことなんです。ここで、そのどの女であっても、

「しかし生命の恩人であるイエスに、高価な純粋なナルドの香油の入っている石膏の壺をぶちわって」

と書いてます。生命の恩人なんですよ。生命の恩人と思ったから、これは自分を棄ててでもキリストに自分を献げたいという女性の思いがあるということ。我々はキリストに信仰を持ってますけれども、キリストを生命の恩人と感じたことって、あまりありませんよね、キリストが生命の恩人だと。それは、死の病気をお医者さんに助けられたとか、溺れているところを助けられたというなら分かりますよ、これは生命の恩人ということです。

小池辰雄はここで

「生命の恩人」

とハッキリ書いている。小池は信仰をもって語りましたけれども、キリストを「生命の恩人」と思っているから、こういう言葉が出てくる。小池はやはり、

「イエスは生命の恩人だ」

と思っている。僕もこれは生命の恩人だと思いますよ。自分をこの女性に投影して、このマリヤが――マリヤか「罪ある女」かわかりませんよ――その行為をなした一人の女性が、キリストを本当に生命の恩人として見ているということは、小池自身がその生命の恩人だと思っているから、こういう言葉を言うわけです。いろいろ書いてありますよ、

「完全に救われた」

とか、「なし得るかぎりをなした」とか。これはイエスの言葉ですね、

「この女は、なし得るかぎりをなして」

と。最善をなしたということです。「なし得るかぎりのことをなした」なんて、こういう言葉がキリストから出てくるんですよ。香油を注いだというのは、単なる香油を注いだとか、何か凄く香油がその部屋にいっぱい漂って美しい情景というのではない。これはもう本当にイエスの死の準備をしてくれたその女性に対して、

「この女性はなし得るかぎりのことをしたんだよ」

ということをキリストは激賞するわけです。

小池辰雄のものを読んでいると、

「棄身の愛」

とか言うでしょ。「棄身の愛」と言うと、もの凄く難しく聞こえるわけです。

「棄てないといけないのか」

と思う。そういうことでやっているのではない。この女性のやったことは自分の力でやっているのではない。生命の恩人と感じたから、もうやらないではおられないで、これをやった。そのことを「全的」とか、「棄身の愛」とかいう表現で言っている。これは決して自分の力でやっているのではないということは、小池の他の文章からも分かります。

前にここでちょっと学んだと思いますけれども、小さい木の葉が風にひらひら揺れている。これが

「あるがままの姿」

ということです。何もその木の葉っぱは自分の力ではやっていない。風に吹かれたままゆらゆらしている。そういうのが、

「やらざるを得ない」

というような小池の本心なんです。決して、難しいことを小池は言っているわけではない。「あるがまま」ということがここに出てきますけれども、それは木の葉が風に揺られている、それが「あるがまま」なんです。あの幼児の姿を見ていたら、本当にあれが「あるがまま」ですよね。もう本当にあるがままに母のふところに飛び込んでいくでしょ。あれが本当に自然の姿で、一生懸命で母の方にしがみつくんですけれども、あれは自分の力でやっているのではない。そうしないでいられないから、母にしがみつく。そういうのが「あるがまま」ということなんです。それを難しく考えないで、もっと「あるがまま」ということを受け

とってほしいなと僕は思う。

我々はなかなかそこまではいかないというのは、どれだけ我々が救われ難き存在であるかということの裏付けなんです。「完全に救われた」というようなこともありますけれども。本当に完全に救われて初めて、

「ああ、あの方以外には自分はないんだ」

という思いですね。それが

「生命の恩人であるということを実感した」

ということであると思う。今読んでもらったところに、

「完全に救われた」

「全的にイエスに香油を注いだ」

「壺をぶちわって」

とかいう言葉が出てくる。「全的」という言葉を僕は小池辰雄からよく聞きましたけれども、ここで5、6回出てくるんです。

「ナルドの香油を全的にイエスに注いだ」

「しかも「壺をわって」とは、自分を全的に献げての心境の現われである」

「あるがままの自分を全的に投げ出す」

とか、重ねてこの「全的」という言葉を使う。その次に出てくるのは、

「ただその人があるがまま全的に自分を投げ出してイエスに信じ入るとき、無条件降伏をするとき」

「自分の現状がどうであろうと、それ自体を全的にキリストに投げかけること、これがキリストを信ずるということである。文字通り「無条件」の世界である。」

こういう「全的、全的」というのは、何か難しいんですけれども。幼児（おさなご）が母親のふところに駆け込んでいくという、あれが「全的な姿」です。母親は、幼児が洟垂（はなた）れであろうと、小便垂れであろうと、文字通りそんなことは全然意に介さないで全部受け入れるでしょ。全部受け入れているというのが母親の姿で、そういうふうなものが「無条件」で、子どもの姿が「全的」であるということを言っている。

子どもがニコニコ笑ってたら、母親にしろ父親にしろ、子どもが笑っていたら、それだけで喜びですよね。それだけで感謝な気持になります。さっきの讃美歌にもありましたように、本当に僕らが子どもみたいになって、キリストにしがみついていくときに、先ず喜んでくださるのが天にある喜びなんですね。そういうことが非常にまた僕らの喜びではないですか。僕らがキリストのところに行ったら、天に喜びがあるというようなことです。そういう状態でこの女性はあったんだろうということを思います。

僕らはすごく平凡な人間ですよね。こないだ、緒方貞子〔註：1927～2019。日本人で初めての国連難民高等弁務官として1991年から2000年まで務めた〕さんが亡くなられました。あ

の人は世界的に非常に有名な人ですが、あれはクリスチャンですね。確かそうだと思う。あの人はあの人で能力があるから、そういうところで用いられているということです。あの人と我々とは全然レベルが違うということではありえないんですよ。僕らも同じなんです。キリストの目から見たら、緒方貞子さんの働きも、我々が喜んで生きているその在り方も、神の目から見たら全然、あの方も我々も変わらないということですね。

それから、ここで「無条件」ということで、小池辰雄は、

「取税人であろうと、パリサイであろうと、盗賊であろうと、遊女であろうと、放蕩息子であろうと、癩病人であろうと、何であろうと、その人の健不健、善悪の如何を問わない。」

と書いてあります。これもしょっちゅう小池から聞いたことですよ。「パリサイ」というのは、キリストの敵みたいに、もの凄くキリストの言葉も激烈ですよ、「パリサイ人（びと）」に対して。けれども、パリサイの中にも信じた人がおられて、それがどんな相手であろうとも、キリストは、今出てきたような女性に対してでも、パリサイ人に対してでも、同じ態度で接せられているのは確かですよ。パリサイ人は敵であると言いながら、パリサイ人の一人ひとりに対しては全く同じように接しておられる。ただ相手は、それを受け入れるか受け入れないかが問題なんです。それでこれが、自分がどんな状況であろうと、自分がどんな罪を犯したものであろうと、

「そういうマイナス面が何であろうと、我々は問題ではないんですよ」

ということを言ってくれている。「無条件」というのは、そういうことです。幼児（おさなご）がウソをついたとしても、母親は受け入れる。子どもでもウソをつきますよね。けれども、そういうふうなことも関係なしに、母親は自分の子どもを抱きます。それと同じなんです。我々がどんな状況であっても、神の目からはそういうものは全然差別して見ておられないということがあります。

幼児の姿というのは最もやはり美しいし力強い。やはり自然のままでやっているのが一番美しいし、力強いということも言えるのではないかなと思います。どうしても、常識的に、人間というのは常識的な判断をしてしまう。僕らは生きているときに、常識が限りなく溢れていますよ。もう常識常識で、そういう判断ですぐしてしまうんだけれども、そういう品定めは絶対にイエスはなさらない。いつもイエスの目は神の目で人間を見ておられるということです。いつもキリストの目は神の目ですから、その人の過去はどうであろうと、そういう見方は絶対なされることはないんだということが言えると僕は思います。この数行の中に書いてあるのはそういうことではないかと思います。

●無的実存

そして、その次の所131頁の始めから読みます。

《私が無的実存というのは、こういう在り方のことである。全的自己献供の態勢の人を無者という。この女はそういう無的自己投入をした。香油と共に自分そのものをこの女はキリストにぶちまいた。十字架にかかるイエスに対する葬りの愛の香油よりもイエスをよろこばせたのは、この女の純情そのものであった。

さて、自分という壺をぶちわって神の前に投げ出した最大の自己投入者は、イエスであった。彼は投入また投入の実存者であった。

「あなたの聖意をこの自分を通して実現してください」

が真の「砕け」の心である。そのような無者でキリストはあった。》

さっきの続きなんですけれども、今読んだところの最後に、

「自分という壺をぶちわって神の前に投げ出した最大の自己投入者は、イエスであった。彼は投入また投入の実存者であった。「あなたの聖意をこの自分を通して実現してください」が真の「砕け」の心である。そのような無者でキリストはあった。」

と。この本は『無者キリスト』ということなんですけれども、このイエスの在り方こそが無者の在り方であるという。ところが、我々は無者にはなりえないんです。もういろんなしがらみがあって、とんでもないことですよ。けれども、生命だけは、生まれながらにしてというか――生まれながらに罪がないとかいうのではない――本当に何もないんだけれども、キリストだけは天の父の御意をそのまま徹頭徹尾、実現していかれた。そういう在り方。だから、

「無者であるところは無限無量である」

というような言葉がそこから出てくるんです。イエスこそ自分の殻を破って、神の前に全身を投げ出して、自己投入をして、投入また投入。だから、神の霊をいただいて、キリストは人間でありながら、百％に神の霊をもらって生きていかれた方です。それを

「実存者」

と小池辰雄は言うんです。自分を投げ出して人のために尽くすという、それが「実存」という意味です。そういう、

「あなたの聖意をこの自分を通して実現してください」

という、その思いでイエスはこの三年間の公の生涯を送られたということです。

「そのような無者でキリストはあった。」

という、この表題の「無者キリスト」ということの意味がこの三行の短い間の中に書かれています。

小池辰雄は難しい言葉を言うと同時に、「壺をぶちわって」とか「ぶちまいて」とか、そういう日常使っている言葉も使われる。この「全的、全的」というのが5回も6回も出てきたと言いましたけれども、「全的」という言葉はもの凄く難しいですよ、我々にとっては。

「これを全的にやってください」

とか、もし誰かに言うとしたら、

「全的とは何や？」

とかいうことになって、こんな難しい言葉はないですよ。「全的」という言葉は「全」と「的」の二つの言葉ですよ。けれども、これを知ってもらおうと思ったら、それは難しい。この「全的」ということを全然知らない人に言おうと思ったら、これほど難しい言葉はないのではないかなと思いますね。

●自分の中に霊震が起きる

《さてそれではヨハネ福音書第20章のドラマにあたることにする。キリストが十字架の刑死を遂げた翌々日の未明、マグダラのマリヤは真っ先きに墓に向った。ところがイエスの墓を封じていた岩盤はとりのぞかれ、イエスの死体が見えないので、驚いて走り帰り、ペテロとヨハネにその旨を告げる。この二人は急いで墓場に馳せつけた。空しい墓を見て、悄然としてもどって来た。

けれどもマリヤは、墓を去りかねて、墓の外側にたたずんで泣いていた。一体あの大岩盤は誰が押し転がせたのだろう。実はその早朝妙な地震があった（マタイ28・2）。それは単なる地震ではない。霊震と申したい聖霊のはたらきによるものであった。

「主の使が天から降り来って、かの石を転ばし退けた」（マタイ28・2）

とはこのことである。後日パウロがピリピ伝道の際、獄につながれたが、パウロとシラスが聖名のゆえの迫害を歓び、神を讃美していたとき忽然として起こった地震がやはりそのような霊震であった（行伝16・26）。過日、わが松代に起こった連続的地震は何を意味するものであったか。霊震に応ずる地震であったと思われる。霊界をあなどってはならない。

聖書には次元の異なる激しい事象がたくさん記されてある。そのような次元の現実を無条件に信受して読まないと聖書は読めるものではない。しかし驚嘆し畏敬の念をもってそのような霊的現実を体受してゆくと、何か知らんこちらが根源的なものに触れつつあることを感ずるようになる。単なる知的判断や理解などで聖書の現実の扉は開かれるものではない。いわゆる聖書研究などで何のかのと議論しても始まらない。研究というなら、祈り心をもって霊察・霊知する角度をもつべしである。自分の中に霊震が起きる。そこに聖霊のバプテスマを体験することになろう。》

最初のところに、

「マグダラのマリヤは真っ先きに墓に向った。」

という。一番最初に行ったのはこの女性だった。真っ先きに墓に向った。そして、イエスの死体が見えないと。弟子たちもその後、墓に行くわけです。

「空しい墓を見て、悄然としてもどって来た。」

弟子たちは戻るんですけれども、この女は戻らない。この違いがあります。だから、あとで言うように、この女性はイエスと出会うんです、そこで初めて。とにかく、真っ先に駆けつけたのもこの女性であるし、墓にずっと居ったのもこの女性である。弟子たちとの差異がよくここで書かれている。さきほど、最初にこの女性のことを学んだように、本当に生命の恩人だったから、イエスのことが慕わしくて慕わしくて仕方がない。それを「マグダラのマリヤ」と小池辰雄は言うんですけれども、その女性は真っ先に墓に向かって、そして墓に立ち去りがたくてそこに居ったということです。

それから、神のことというのは次元の異なることですから、現実の我々の生活からそういう目で聖書を読んでいたら、いつまでたっても聖書の扉は開かれないんだということを書いてくれています。御霊によって「無条件に信受して」、無条件にキリストを自分の贖い主として、

「無条件に信受してからだで読まないと聖書は読めるものではない。しかし驚嘆し畏敬の念をもってそのような霊的現実を体受してゆくと、

そういうものを自分のからだで――讃美歌にも「身を任せて」とありました――このからだ全体で受けていくと、

何か知らんこちらが根源的なものに触れつつあることを感ずるようになる。」

ということです。本当にその中に入っていかないと、根源的なもの、天の世界のことは全然分からないんですよと。だから外から、

「単なる知的判断や理解などで聖書の現実の扉は開かれるものではない。」

という。「研究、研究」というのは無教会の人がみなやっていたから、それに対するプロテストがしょっちゅう出てきます。小池辰雄は、

「そういう在り方とは違う。もっと霊的にキリストを受けとらないと、全然、聖書というものは分からない」

と言う。だから、

「霊察・霊知する角度をもつべしである。自分の中に霊震が起きる。そこに聖霊のバプテスマを体験することになろう。」

と。外側の地震だけではない。

「自分の中に地震が起きないと、これは分からない。聖霊によるバプテスマで自分の中に地震を起こしてもらわないと、体験することはできない」

ということをここで言うわけです。

僕の経験から言いますと、学生の時です、僕が初めて小池辰雄の話を聞いたのは――小さいお寺で何かお話があって、十人位の学生さんが集まっていた――「日の丸」（日章旗）のことを言われた。その時に、僕は話を聞いていてこわくなった。小池の言葉がどんどん入ってきて、もう自分の中でこわさが出てきた。あれが初めての「霊震」というようなことであっ

たのかも知れません。そのあとはそういうこわさはなくなりましたけれども、初めて聞いた時には小池の言葉は本当に僕の中で揺れ動いたという体験があります。

「こんなのウソや。こんなこわい世界はいやや！」

と思ったくらい、そういう学生の時の記憶があります。自分の中にやはり霊震が起こらないことにはダメです、単なる地震ではないんですよと。確かに聖書に書いてあるように、

「主の使いが天から降りてきて、かの石を転がしたのであろう」

ということも事実でしょうけれども、本当のところは、

「自分自身の中にこういう霊の地震が起こらなくては」

ということをここで書いてくれています。

●**「マリヤ！」「ラボニ！」**

それから、いよいよ「マリヤ！　ラボニ！」のところです。

≪**「マリヤ！」「ラボニ！」**

マグダラのマリヤは涙ながら身を屈めて墓の内をうかがった。すると二人の天使が躯のあったはずの首のところと足のところに坐していた。そしてマリヤにこう問いかけた。

「女よ、何で泣くのです」

マリヤは応えた。

「誰かが、私の主様を取り去ってしまいました。何処へもっていったかわからないのです」

そう言いながらうしろを振り返って見ると、そこに立っている人があった。その人が天使たちと同じようにたずねた。

「女よ、何で泣くのだね。誰をたずねているのだね」

マリヤは園守だと思って、

「旦那さん、もしやあなたがあの人を取り去ったのなら、何処に置きなさったか教えてください。わたし引き取りたいのです」

そういって一瞬向き直ったその途端、その人が親しげに

「マリヤ！」

と呼びかけた。その声はマリヤのハートに沁み込んだ。そのなつかしい声の主は誰あろうイエスであった。マリヤはハタと振り返って、

「ラボニ！（先生！）」

と叫んだ。

「マリヤ！」

「ラボニ！」

この単純な名の呼び交わし。名は全存在の内実をもっている。たとえば我々が「漱石さん」というとき、そこには彼の全作品と生涯と人格が渾然としてふくまれている。

七つの悪鬼になやまされて、絶望的な現実から救い出されて、歓喜にあふれ、献身的にイエスに奉仕していた彼女。自分のもっていた最も大切な香油を、壺をぶち破(わ)ってことごとくイエスに注いだ彼女。誰よりもイエスを慕って墓場に馳せつけた彼女。イエスは勿論、一人一人をその存在の特性において愛しておられたのであるが、「マリヤ！」の呼びかけ一つに、イエスの無量の顧みがこもっていた。マリヤは「ラボニ！（先生！）」といってイエスにしがみつこうとした。敬慕と歓喜のあまり。すばらしい霊体のイエスである。霊光があふれていたにちがいない。マリヤがしがみつこうとしたので、イエスは、

「私にさわるな。まだ父のみ許に昇らないからだ。……」

といった。≫

ここはヨハネ伝に書かれている、「マリヤ！　ラボニ！」の所ですね。最初に、

「女よ、何で泣くのです」

これは天使の言葉なんですけれども、前にちょっと、

「死んだ者の中に生きた人をなぜ尋ねるのか」

というのを学びましたけれども。これと同じです。

「なぜ、泣く必要があるのか」

と、天使が言われるわけです。

「泣く必要はないではないか。死んだ者の中に、なぜ、生きた人を捜すのか」

と。あの言葉と同じ言葉ですよね。「泣く必要がなぜあるんですか」ということを先ず天使から言われる。そうだけれども、泣きますよね。それはもうそれでいいんですけれども、その天使の言葉も非常に大切で、

「泣く必要はないんだよ」

ということです。それからまた、天使と同じように、

「女よ、なぜ泣くのだね。誰をたずねているのだね」

というふうに今度は、キリストからそういう言葉をかけられる。

「マリヤは園守だと思って、「旦那さん、

ここいいですよね、「旦那さん」と。「主よ」とか言わないで、「旦那さん」と。これは本当に園守(そのもり)だと思って、

もしやあなたがあの人を取り去ったのなら、何処に置きなさったか教えてください。わたし引き取りたいのです。」

そう言った瞬間に、「マリヤ！」と呼びかけてもらった。その声を聞いて、

その声はマリヤのハートに沁み込んだ。そのなつかしい声の主は誰あろうイエスであ

った。マリヤはハタと振り返って、「ラボニ！（先生！）」と叫んだ。

「マリヤ！」

「ラボニ！」

と。これほど短い会話はないですよ。

「お母ちゃん！」

「おお、息子よ！」

というのと一緒ですよ。「お母ちゃん！」と言ったら、「おお、可愛い息子よ！」というのと同じです。「マリヤ！」と呼ばれたら、「ラボニ！」と答える。

もう神の国では何を言わなくとも全部通じるということですよ。この呼び交わしだけですべてがわかる。天国というところはそういうところなんです。ゴチャゴチャと何も言わなくとも、キリストの愛では、キリストの名前を呼ぶだけで全部、存在が分かってもらっている。だから、

「この単純な名前の呼び交わし」

これが神の世界です。「何かをしました」とか、そんなのとは違う。「主さま！」と言ったら、もうそれだけですべてがキリストにとっては分かるし、我々もそれ以上のことを言わなくてもいい。その愛に包まれるということがこの事態だと思う。

「マリヤ！」と呼ばれたら、

「その声はマリヤのハートに沁み込んだ」

と書いてます。全身を貫いたのではないでしょうか。そして、そう呼ばれたら、「ああ、先生！」と言わざるをえないような、本当に感嘆詞に似たような言葉が交わされたということなんです。これはヨハネ伝にそのまま書いてあるから、本当にその通りだったんだろうと思います。その他のことは何も言う必要はなかったということですね。

「七つの悪鬼になやまされて、絶望的な現実から救い出されて、

絶望的な現実ですよ、本当にそういう病気をしたら。

絶望的な現実から救い出されて、歓喜にあふれ、献身的にイエスに奉仕していた彼女。」

と書いてありますように、本当に生命の恩人で、もう感謝に溢れてイエスに従ったんだろうと思います。これもマリヤにとっては、そうせざるを得ないで、従って奉仕していたのだろうと思います。

「あの方のためには何も惜しくはない。もう自分の全身をもってでも従いたい」

というようなことです。マリヤのことをまだ書いてます。

「自分のもっていた最も大切な香油を、壺をぶち破ってことごとくイエスに注いだ彼女。」

と書いてある。だから、

「なしうることをなしたのだ」

というキリストの言葉があるようにことごとくそれがイエスには分かっている。彼女が何をしようとしたかということがもう今までの経験から全部分かっているということです。

「誰よりもイエスを慕って墓場に馳せつけた彼女。」

と。本当に真っ先に行った。だけどそのマリヤの在り方だけではなくて、

「イエスは勿論、一人一人をその存在の特性において愛しておられたのであるが、」

と書いてあります。

「マリヤだけが特殊なのではない。あなた方一人ひとりもその特性においてキリストに愛されている」

ということです。

「「マリヤ！」の呼びかけ一つに、イエスの無量の顧みがこもっていた。」

イエスという方は誰か人と対する時は、その人に全面的に関わっておられるんです、どれを見ても。たくさんの大勢の人がついて行ったとき、血漏を患っている女に対してもそうでしたね。どういう人に対しても、イエスの無量の顧みを一人ひとりが持っていたということです。十字架上の盗賊もそうでした。

「自分を覚えてください」

と言った時も、全面的にイエスはその人に対しておられたのだろうと思います。だから、ああいう言葉が残っているんだと思う。

「マリヤは「ラボニ！（先生！）」といってイエスにしがみつこうとした。敬慕と歓喜のあまり。」

と書いてあります。そうすると、

「イエスは、「私にさわるな。まだ父のみ許に昇らないからだ」といった。」

とあります。

●中へ直ちに突破突入する

《マリヤがイエスにとりすがろうとしたのも無理はない。純情の彼女である。しかし、彼女が本当にみ霊を受けていたら、「ラボニ！」と叫んでイエスの中に全存在をもって躍り込んでいたであろう。そうすれば、イエスにしがみつくよりもすばらしい現実に入ったはずである。本当の世界は、外からしがみつく世界ではなく、中へ直ちに突破、突入する世界である。すなわち一如、一体の現実である。われらが「主様！」「キリスト様！」と称名するとき、直ちに主と一つとなる。これが祈りの極致、信のまことの現実である。イエスが「父よ！」と呼んで祈ったとき、その祈りはいつもこの現実、一如の世界であった。だからイエスは

「私と父とは一つである」（ヨハネ10・30）

と告白した。

であるから、復活のイエスがマリヤに「触れるな！」と言ったとき、その奥に「さわるに及ばないよ。私はおまえの中に入るよ！」と約束しているのである。天界に昇ったあとで、み霊のキリストとしてマリヤの中に全的に入ってくださったにちがいない。

マリヤに現われたあとで、復活のキリストは弟子たちに現われたが、幽霊くらいにしか思わぬトマスには、マリヤの場合とは反対に、

「おまえの指をここに伸べて、私の手を見よ、おまえの手を伸べて、私の脇に差し入れよ……」（ヨハネ20・27）

と言っている。キリストの霊体に現実に触れてみたトマスは驚嘆して「わが主、わが神！」と叫んだ。》

ここで、

「私にさわるな。まだ父のみ許に昇らないからだ」といった。」

と。これはそのあとにすぐ出てくる、トマスには

「私に触れ」

と言った。これは矛盾すると思って、僕は分からなかった。「触るな」と言っておきながら、こちらでは「触れ」でしょ。これは矛盾していると僕は思っていた。ところが、小池のこの文章を読んで、よく分かりました。トマスは疑い深い人間だから、トマスには

「触ってここに指を入れよ」

と。ところが、マリヤの方は違いますよ。マリヤは抱きつきたくて抱きつきたくて仕方がない。それは当然ですよ。マリヤにしてみたら、生命の恩人だから。もう抱きつきたくて抱きつきたくて仕方がないんだけれども、

「まだ、触るな」

ということを仰った。ここで小池はちゃんと書いてくれていますね。

「しかし、彼女が本当にみ霊を受けていたら、「ラボニ！」と叫んでイエスの中に全存在をもって躍り込んでいたであろう。そうすれば、イエスにしがみつくよりもすばらしい現実に入ったはずである。」

と書いてありますように。我々はイエスなんか知りませんよ、僕らは現実のイエスを知らないけれども、霊界のイエスは知っていますから、

「それが私たちの中に突入突破してくれないとどうにもならんのですよ」

ということをここで書いてくれている。

「イエスにしがみつくよりもすばらしい現実に入ったはずである。本当の世界は、外からしがみつく世界ではなく、中へ直ちに突破、突入する世界である。」

と。僕は「母親と幼児」の例えをよく言うんです。今日もちょっと言いました。けれども、なんぼ母親は子どもを抱いても、子どもと一体には決してなることはできない。なんぼ愛

しく思っても、一体となることはできない。キリストが天界に行かれて、御霊になったキリストが我々に入って初めて一体となることができるんです。その喜びです。その「一体となる」というようなことは、

「キリストと我々が一体となる」

ようなことを言っている人は一人もいませんよ、どこの教会に行っても。全部、外からなんです、外からしがみつく世界のことしか言わない。そういうもんじゃないですよ。小池辰雄の一番特徴的なのは、この

「中へ」、「突入」、「一如」、「一体」

とかいう言葉を何回も使うわけでしょ。そして、ヨハネ伝10章30節を引用して、

「私と父とは一つである」

「私を見た者は父を見たのである」

ということが、「一つ」「一体」という現実を如実に表している言葉なんです。

「私と父とは一つである」

とキリストが言ったように、我々も、

「イエスと我々は一体である」

ということを口に出して言えたら、それほど嬉しいことはないですよ。「父と私とは一つである」と、これはイエスの言葉ですけれども、我々も

「私とイエスとは一体である。一つである」

ということが言えたらどんなに素晴らしいことかと僕は思う。御霊のキリストを頂いて、

「直ちに主と一つとなる。これが祈りの極致、信のまことの現実である。」

と書いてあります。

「信の在り方は本当に「一つになる」ということに尽きる」

ということです。これが小池辰雄の言いたいことなんです。

「外からではないですよ」

ということを言いたい。だから、よく引用されますよね、パウロの言葉を。

「キリストわがうちに、われキリストのうちに」

というような言葉を何回も何回も小池は言う。これが祈りの極致、信仰の極致なんです。

それがなかなかイエスの中に入ることは稀（まれ）で、どこまでも外から拝もうとするわけです。もの凄い距離がある。外からだったら、どうしてもしがみついて――それは嬉しいですよ――母親と子どもがしがみついて抱きついていることは嬉しいことなんですけれども、なんぼ愛していても子どもの中には親は入ることはできないですよ、しがみつくだけで。

「キリストが十字架を通って、昇天して、御霊となって生きておられるから、我々の中に入って生きてくださる」

ということがここから出てくる。そういうことでないと本当の信仰ではないですよと。

だから、我々の信仰というのは、
「ここに十字架が立っている」
とか、そういうことでは全然ない。我々は、
「奉仕をしましょう、ボランテアをしましょう」
とか、そういうことは全然やってないでしょ。やってないけれども、
「喜んでいる姿を人に見せる」
ということは非常に大切なんです。
「あの人があれだけ喜んでいるのは、いったい何があるのか？」
ということを思わせるということが非常に大切です。どんな小さい人でも、このキリストを喜んでいる姿を見せるということが、大きな言葉でいったら、伝道なんです。僕は「伝道」とか、そういう言葉は嫌いです。伝道といったら、
「何かせんとあかんか」
と思うじゃないですか。そういうことではない。
「あるがままにキリストと共に生きる」
ということが伝道なんです。そこまで砕けないと、そこまで行かないと、誰も入れない。
研究して入れるんだったら、研究したらいいですよ。だけど、研究して入れるものではない。
研究から学んで入れるものではない。
「自分がこういうふうに喜んでいるという姿を見せる」
ということが、まぁ普通の言葉でいったら、伝道ということになるけれども。そういうことを何も知らない人にもみんな、喜んでいる姿は分かりますよね。分かりますよ、別に何もしなくても。
「あの人が喜んでいたら、そこへ行きたくなる」
ということはあります。そういうことがここで言われていることなんです。だから、
「さわるに及ばないよ。私はおまえの中に入るよ！」
と、これが約束なんです。
「今はそんな、触って抱きついてもそんなのは意味がないんだ」
というようなことを言っている。
「み霊のキリストとしてマリヤの中に全的に入ってくださったにちがいない。」
と。この「全的に」というのは、キリストが全的に入ってくださるので、キリストが主語です。

●新天新地への希望

《現在は、イエスが十字架をもって贖罪の現実を、復活と聖霊降臨の事実をもって聖霊遍在の現実を自由に開示しておられる現在である。であるから、「マリヤ！」「ラボ

ニ！」の呼び交わしで、直ちに即如一体の信の現実が与えられる。現代キリスト教界が、もし一般に気がぬけているとするなら、この単純卒直なる信愛の現実が欠如しているからである。

　復活永生のキリスト、現に活きて天界に在り給うキリストをみ霊をもって信受してゆけば、我々自身、甦りの人となる。パウロがいっている

「キリストわが内に」

とは、み霊のキリストわが内にであって、私たちは死を知らない人となる。相対的生死を超えた永遠の生命の人となる。キリスト者とはそのようなキリストの生を生きる人である。復活新生のこの根源現実を現有していると新天新地の双葉に我々自身が成っているから、歴史の終末の新天新地への希望がはっきりと湧いてくる。そうでないなら、どんなに復活を云々しても空しいことである。》

ここの「現在は……」という文章はちょっと分かりにくいですよ。

「現在は、……開示しておられる現在である。」

と書いてありますが、

「これは時代を超えて、復活と聖霊降臨の事実をもって聖霊遍在の現実を自由に開示している、現在もそうである」

というような意味だろうと思う。だけど、

「聖霊遍在の現実を自由に開示している現在」

と、こういう言葉はもの凄く難しいですよ。もっと易しく言ってほしいなと思うくらい難しい表現の仕方ですね。

「であるから、「マリヤ！」「ラボニ！」の呼び交わしで、直ちに即如一体の信の現実が与えられる。」

この言葉も難しい。そんな難しいことを言わなくても、僕はいいと思うんですけれども、まぁ明治の人だから仕方がないですね。

「即如一体の信の現実が与えられる」

こういう言葉ももの凄く難しいでしょ。

「現代キリスト教界が、もし一般に気がぬけているとするなら、この単純卒直なる信愛の現実が欠如しているからである。」

そうですよ、この最後の言葉は分かりますよね。現代キリスト教は、どこへ行っても、こういう単純な

「マリヤ！　ラボニ！」

という単純な名前の呼び交わしのことを言う人は少ないですよ。信の世界というのは、キリストの世界というのは、こういう単純な世界ですべてが分かり合える世界なんですね。それを何のかんのとちょっと難しく言い過ぎているというところがあります。小池のこの

言葉も難しく言わなくても、最後の
「この単純率直なる信愛の現実」
をもっと分かりやすく言ってくれたら、「それでみんな分かるんですよ」というようなことを言ってくれればそれでいいのにと僕は思う。『無者キリスト』はいい本なんだけれども、やっぱり段々段々難しくなってきている。小池流の言葉の使い方もちょっと難しい。それで最後のところの、
「復活永生のキリスト、現に活きて天界に在り給うキリストをみ霊をもって信受してゆけば、
ここに「信受」と書いてありますね、受けとればと、
我々自身、甦りの人となる。
これは今、「復活」のところですから、そういう復活信仰の
「甦りの人となる、死を知らない人となるよ」
と。
パウロがいっている「キリストわが内に」とは、み霊のキリストわが内にであって、私たちは死を知らない人となる。
甦りの、死を知らない人となると。
復活新生のこの根源現実を現有していると新天新地の双葉に我々自身が成っているから、歴史の終末の新天新地への希望がはっきりと湧いてくる。」
我々はまだ双葉（ふたば）な存在ですよということを言ってくれている。まだ小さい、本当に芽が出たと同じような、か細い双葉の存在です。その双葉であっても、
「私たちはキリストにあって芽が出たから、新天新地の大希望の中に生きていける」
ということを言ってくれている。
「そうでないなら、どんなに復活を云々しても空しいことである。」
と。「復活、復活」と言っても、こういう御霊によって知らないと、御霊によって教わらないと、それが分からない。双葉であるということさえ分からないんですよということ。
「キリスト者とはそのようなキリストの生を生きる人である。」
キリストの生きたその本当の生命を生きる者こそキリスト者である、それが真のキリスト者であるということを言ってくれている。
「御霊を持たない者はクリスチャンにあらず」
というパウロの言葉がありますが、それと同じことを言っている。
「キリスト者とは、そのようなキリストの生を、死んでも死なない生を生きる人が真のキリスト者であります」
ということを言ってます。そうでないと、ただ勉強してキリスト者になっているということも悪いことではないとは思いますけれども、まだまだ遠いということを小池は言いたく

て仕方がない。小池の体験から、そういうことを言いたくて仕方がないわけですね。

そういうことで、ここで終わりたいと思います。あと、「昇天」という所がありますが、これをまた読み出すとちょっと長くなります。「昇天」の所では、キリストが昇天されていくことが書かれていて、昇天される前に御霊を与えるという約束とか、そういうことが触れられておりますが、それは次にしたいと思います。それで今日は終わりたいと思いますが、何か質問ありますか。

●終末

……。僕は「終末」とは、キリストが来られたのがもう終末だと思っている。創世記から書かれているでしょ。創世記も、人間は神さまを信じないということから入ってますよね。創世記の一番最初から、

「人間はもう罪びとである。神さまを知らない」

というような認識がずっとあった。前から人間は、創り主である神を信じないというような歴史がずっとあって、キリストが来られて初めて、救いが達成された。

「キリストが来られたということがもうこの終末の始まりですよ」

という。そういうふうに僕は「終末」というものを捉えている。そうでないと、

「人類の救いはキリストによってなされた」

ということがありますから、人間を神さまがご覧になったときに、

「創り主である私を全然知らないで生きておれば、本当に神さまのところには行けないんだ」

という、その神の悲しみがある。神の悲しみです。今日は

「キリストの寂しさ」

というところもありましたけれども、「神の悲しみ」というか「寂しさ」というか、それは人間が神さまに慕ってくれないと、喜びがないんです、神さまにとって。そういう事態を打破してくれたのがキリストの十字架なんですね。だから、今の時代が終末であるということです。新天新地はまだ、

「全部のものが救われるのを神が忍耐して待っておられる」

とペテロが言いましたように、まだまだ人間は神さまから離れているから、全部が神のところに戻ってきてくれるようにと、そういう願いが神さまからはあるということなんです。そういうことが、

「今は、終末の時代だから、救い主が生まれた。救い主がこの世に来られたんだ」

ということをやはり言わないといけない。この世の中だけで、神のドラマがずっとなって行っているので、そのドラマの中に私たちは組み入れられているという重要な一員なんです。そういうふに僕は「終末」というものを捉えています。

それから、日本の文化ではあまりハグ〔hug 相手を抱きつつむ西欧式の挨拶〕はしないということですけれども、僕も恥ずかしくて、そんなことはできませんよ（笑）、そんな抱きつくとかね。だから、僕はいつもそう思って例えるのは、

「母親と幼児のあの抱きつき」

ですね。あれは日本でもやりますよ。子どもが来たら、抱っこしたりするでしょ。あれだったら自然ですよね、日本人にとっても。あれが僕は「抱きつく」という文化の、日本人にとってはあまり違和感のない表現かなと思って、いつも僕は「母親と子ども」のことを例えとして持ってくる。

確かに「抱きつく」ということはないですよ。ないけれども、それは日本人の特徴だけれども、それはしょうがないですよ。その文化がそういうものを恥ずかしいと思うから。けれども、僕らは肉体を脱ぎ捨てた時には、やっぱりキリストにハグされるのだろうと思いますよ、僕は。キリストにハグされて、

「キリストが私たちの中に生きて、キリストの中に我々も生きる」

というような世界だろうと思います。小池辰雄も決して、日本人だから、こういう「抱きつく」とか、そういうことはあまり言わないと思います。これは日本の文化の特徴だから仕方がないと思いますけれども、信仰の世界ではやはり、

「キリストわがうちに、われキリストのうちに」

という、そういう信仰の在り方というのは小池がずっと言って来たことです。

僕は近鉄の会社で働いているでしょ。ラグビーの選手が外国から来ている。どこから来たかと聞くと、「トンガから」とか言います。大きな男ですよ、入れ墨もしているしね。そういう人と接している時に、やはり人間の本質というのは喜んでいると嬉しいんですね、お互いに。そんなハグとかしなくても。文化は全然違いますよ、ああいう人と接して。けれども、一言二言、僕が喜んでいることを言うと、向こうもその気になってやはり喜んでくれます。それがあれではないかなと思う。形式はいろいろありますよ、ハグするとか何とか。けれども、そういうことではないと思う。

旧約聖書の「バベルの塔」の話がありますね。

「あれは言葉が通じなくなったから」

というようなことが出てきます。あれは「言葉」ではなくて、一生懸命に人間がやっている文化を育てれば育てるほど、心と心とが通じなくなった話だと僕はあれを理解している。言葉ではないんですよ、言葉は知らなくとも、人間同志ハグできますよ。通じ合うことはできるんです。

「人間の心と心とが通じなくなった」

のが、あの「バベルの塔」の話だと僕は思っている。

「人間と人間の心の隔てを取り除いたのがイエスだ」

とパウロが言っているように、キリストの十字架によって初めて、我々は人と人との心が通じるようになった。それを実現してくれたのが十字架であり、復活それから聖霊降臨であって、形式はどうであれ、人間と人間の心が通じるようにしてもらったのが、中垣を取ってくださったのがキリストだろうと僕は思っている。

御霊によってしか、我々は聖書の言葉を理解することはできないと思いますね。だから、御霊の大切さを小池辰雄は本当に言うでしょ。そうすると、「御霊、御霊」と言って、十字架そっちのけの御霊がくると、これはとんでもない方向に行きますから、小池が

「十字架と聖霊は一体である。十字架をぬきにした聖霊なんてありえない」

ということを口をすっぱくして言っていることです。キリスト教会で、たとえば

「ボランテアをしましょう」

とか何か言ったときは、もうとっくに十字架なんかどこかへ飛んでいってますよ。そこから発しているということは確かですけれども、それが希薄になっていて、やっている人がそれを自覚していないということは言えるのではないかなと思います。

我々には何もない。本当に何もないんです。小池辰雄が言うのは、

「十字架と聖霊、そういう在り方で生きてほしい」

ということだけなんです。それ以外には、我々は持っているものは何もない。本当に何もないんです。キリスト教会は、

「献金をしました。何々をしました。これだけの業績を上げました」

というようなことを言ってますけれども、本来のこの十字架による贖いの、罪を取り除いたことはもの凄いことなんです、本当は。それを声を大にして言っていかないと、違う方向に行ってしまいますね。ちゃんとした焦点をしっかり持っておらないと、流されていくというふうに思います。何人か集まったりすると、

「ここにキリストが立っておられて」

とか、よく言いますけれども、お祈りの中でもそんなことを言いますけれども、本当に喜んで臨在されているんです。喜んでニコニコしながらいて下さると僕は思いますよ、もの凄い喜びをもって。

「二、三人わが名によって集まるところに我もいる」

というのは、本当に喜びをもってキリストが臨在されているということを知ってほしい。単に「臨在している」と言うだけではね、やっぱり、その方が居って語りかけてもらわないと、我々の中には嬉しさも出てこない。

僕は、小池辰雄の本を何回読んでも新しいんです。聖書を読んでもいつも新しいように、何回読んでも新しい発見を僕はしていきますね。この「復活」というところは、

「復活を否定する人がある」

というふうにパウロも言ってますけれども、本当に復活というのは十字架に次いでもの凄

く大切なことです。

「十字架」でしょ、そして「復活」でしょ、「聖霊降臨」でしょ、この三つは絶対に切り離すことはできない。それから全部始まっている。弟子たちがペンテコステのあと伝道しはじめたでしょ。その時にもこの三つを必ず、

「復活したぞ！」

ということをもって言う。けれども、復活を目の前に見ていても、弟子たちはまだ走り出すことはできないんですよ。それが聖霊の働きによって初めて伝道に立ち上がって行くというところがありますから。これなくしては、キリスト教会というのはないんですけれども、それが希薄になっているということがありますね。

●全的に、あるがまま

「全的に」というのはどういうことかと。それはもの凄く難しい。僕は散々聞かされましたよ。僕は70歳位になるまで、それが難しくて難しくて、

「あるがままでいいんですよ」

とか言われても、それも難しくてね。人間は、「あるがまま」というのはもの凄く難しい。

「全的である」

とか

「あるがままである」

とかいうことは、もの凄く難しいことなんです。僕の経験でいうと、もの凄く難しいことなんだけれども、御霊とこの十字架を受けとってからそれが分かるようになりました。「全的」ということも「あるがまま」ということも、凄く分かるようになりました。

僕は近所の集まりなんかに行くわけです、自治会の会長もしましたから。そうしたら、みんなが言うんですよ、

「弘野さんはもの凄く自然やね。自然にやっているから」

と。僕はそんな意識は全然ないですよ。そやけどね、十字架をもらってから、もの凄く自然になった。それを言われて僕は初めて気がつきましたけれども。

「自然で、あるがまま」

ということは、

「ごく自然なことをする」

ということですけれども、それをしようと思ったら、自分から出てこないですよ、そういうことも。やっぱり十字架をもらってから初めて僕は自然な振る舞いができるようになった。本当に自然な振る舞いができるようになって、

「弘野さんは、本当に自然ですね」

とか、何人かから聞いたので、やはりそうなんだろうなと思いますね。それは努力してそ

うしているわけではない。全然、努力ではない。それは不思議なことですね。

僕には「愛」なんかありませんよ。ないけれども、そういうふうな自然に振る舞うということが喜ばれるんですね。と僕はそういうふうに思ってつきあってますけれども。

やはり、小池辰雄のこの在り方を学んでほしいと思います。そうしたら、努力しなくて生きていける。「努力」ってしんどいですよ、やっぱし。努力というのは――子どもには必要ですよ、「努力せい！」とか言う――けれども、大人になったらもう、努力なんてしんどいんですよ。僕の経験からいうと、努力というのはしんどいですよ。そやけど、自然にそれができたら、こんな嬉しいことはないですよね。努力しないで自然にいろんなことができるほど嬉しいことはない。

いや、難しいんですよ、「全的」とか「あるがまま」とか散々聞くんですけれども、これほど難しいことはない。僕も「あるがまま」と言われて、なるほど「あるがまま」と思って従いましたけれども、それが「あるがまま」になるというのには、要するにもう50年かかったということですよ。

僕は20歳代から小池辰雄先生とか奥田昌道先生に連なったでしょ。それが分かったのは70歳過ぎてからですからね、50年位モタモタしていたわけですよ、僕自身。それで、「あるがまま」とか「全的」とかいう意味がようやく分かった。難しいことですよ。それは言葉では分かるけれども、気持ちとして自分が納得するというようなことは、なかなか難しい。

「罪」という言葉も、もの凄く難しい。僕も「罪」というのが分からなかったけれども、

「神さまから離れていること」

が「罪」だということが、70歳過ぎて初めて分かりました。それが罪なんだと。

「神さまを立てないで自分を立てることが罪だ」

ということが、僕は初めて分かりました。だから、十字架を受けとってから、罪ということの内容も初めて分かりました。

本当は、もの凄く易しいことなんです。易しいことなんだけれども、人間の罪の深さによって神を認めようとしない――意識しないのではない――もうそれができないんです、できないようになっているんですね。僕はそう思いますよ。自分では、そんなつもりはないのに、神さまを信じることができないんです。できないんですよ。そうなんです。

だから、これは小池が言ってくれていることをよく学んでほしいと思いますね。